
巻き戻しの国

星垣ケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巻き戻しの国

【Nコード】

N3372D

【作者名】

星垣ケイ

【あらすじ】

「貴方は誰？」大切な人を失った少女・絢は、真っ黒な空間で銀の髪の『時使い』に出会う。そして…

前編 願い

「此処は…？」

気が付いたらそこは、何も無い、ただ、黒く染まっただけの空間だった。

『…今日は。』

突然何処からか声が聞こえて来た。

「誰なの？」

そう、小さな声で言ったのに、私の声は真つ黒な空間の端から端まで響いた。

『私は名も無き存在。ようこそ、1228番目の迷い子。』

頭に響く低い声と共に、レースの付いた黒いドレスを着た銀髪の女性が黒の中から現れた。

「貴方は…？」目をぱちくりさせながら問いた。

『…此処に訪れた迷い子に救いの手を差し伸べる』

銀髪の女性は一瞬、私を見つめて。

『時使い、よ。』

「ときつかい？」

私は頭に疑問符を浮かべて首を傾げた。

『そう、時使い。貴方が戻して欲しい時間に戻してあげる。』

言われて私はうーん、と唸った。

戻りたい時間に戻る。

それは、何時いつだっけ。

私が、戻りたい時間は。

ふと、ある人の顔が頭に浮かんだ。
私の、大切な人。

「由樹ーっ！」

少し遠くに居る男の子に声をかけた。

「絢。良かった、来てくれて」

傍に駆け寄ると、由樹はホッとした様に微笑んだ。

「だってせっかく由樹が呼んでくれたんだもん。…で、話して何？」

聞くと由樹は申し訳なさそうな表情をした。

「由樹？」

「……驚かないで、聞いてくれる？」

そう言う由樹の顔が暗かった。

「？ ……うん」

「実は…」

「… え？」

由樹が言葉を発したその時、大きな風が吹いた。

「…っごめん」

由樹は踵を返し、走り去って行った。

「… 嘘………」

取り残された私の瞳から、雫が垂れた。

「うわあああんッ」

私は泣くしかなかった。泣く事しか出来なかった。

あの言葉を聴いたから。

風が吹く中、あの言葉を聞き咎めてしまったから。

『 由詠が死んだ』

中編 記憶

由詠は、私の大切な人だった。
病気がちな彼は、家から出る事が殆ど無かった。
だから私は、彼に外の世界を見せたかったんだ。
だから、無理矢理に外に連れ出した。

そして
：

私は、彼を殺してしまった。

由詠は、誤って川に落ちた私を助けて、溺れたんだそうだ。
事故直後、私は気を失っていたから何も知らなかった。

3日後、目を覚ました時にメールが来て。

由樹が待つ、公園に向かつて、
そして知った。知ってしまった。

私が彼を、殺してしまった事を。

由詠《彼》が死んだ事を。

瞼の裏に在る、あの時の、確かな記憶。

瞼を持ち上げれば、黒い空間があった。

『戻して欲しい時間は決まった？』

銀髪の女性 時使いが私に聞く。

「うん。あの時…由詠が死ぬ前に戻して欲しいの」

『分かったわ。但し…』

「但し？」

『貴方の、為になるかは分からない。』

「…？」

絢は眉を顰めた。

「どう言う事？」

『…だから、』

時使いが言いかけた時、私の前で何かが光った。

「何？」

その光は、段々と形を作っていく。

その姿を見て、絢は目を大きく見開いた。

「由…詠…？」

光は、半透明だけれどもあの時の、由詠になっていた。

「何で…由詠が…」

どうして？

私が殺してしまったのに、何で？

『…その子は霊よ。もう死んでるわ。』

時使いが静かな、低い声で告げた。

「じ、じゃあ、何で此処に…」

聞くと、時使いは目を閉じて。

『貴方に、会いに来たのよ。』

「会いに？」

『ええ。…最初に言ったわよね？此処は…時間を戻したい者が来る空間だ、と。』

「じゃあ…」

『彼も、その1人でしょうね。』

絢は、由詠に恐る恐るといった感じで近付いて行った。

「…由詠、なの？」

それに由詠は、何も言わずにこくりと頷いた。

「私に…会いに来てくれたの？」

『…うん』

「何で…私、貴方を殺したのに」

『殺されてなんか無いよ、僕は』

絢は由詠の答えを聴いて叫んだ。

「だったら何で、此処に来たの！？生きたかったんでしょ？死になくなかったんでしょ？だから、時間を戻したくて…」

『違う！』

由詠は絢の言葉を断ち切った。

『…違うんだ…違う、そうじゃないんだ…僕は君の、誤解を解きに来たんだ』

「誤解？」

何のこと？と絢が訪ねる。

『絢。聞いて。あの時僕が死んだのは、決して君が悪いんじゃない』
『…それが言いたくて、時間を戻したいと思った』

後編 想い

「私のせいじゃない？何で？」

『あの時絢を助けたのは僕の意味でやったんだ。…そうだろう？』

「……………」
『だから良いんだ。絢は何も悪くない、だから時間を戻す何て、しなくて良いよ』

由詠は絢の頭を撫でて、微笑んだ。

それを見て絢は、泣きそうになった。

「ごめんね、由詠…ごめんね…」

『だから良いって』

由詠は再度、絢に触れようとした…が。

『…っ』

絢に触れようとしても、通り抜けてしまう。

「あ…」

絢も目を見開いた。

『もう、お別れだ』

「…うん」

由詠が霊なのは分かっている。

だからずっと此処に居れる訳ではない事も分かる。

「バイバイ、ありがとう」

『うん。もう、大丈夫？』

「大丈夫、時間を戻そうなんてもう、思わないよ」

「…ちゃんと、前を向いて歩いてく」

『うん。』

由詠の体が薄れていく。

そして、殆ど見えなくなった時。

「さようなら、…大好き」

絢はそう、呟いた。

『…時間は…もう良いの?』
後ろから時使いの声がする。

「うん、色々ありがとうね、時使いさん」

『いいえ。…本当に良かったの?』
「…うん」

「ちゃんと会えたし、それに…」
『それに?』

絢は泣きそうなのを抑えて笑った。

「由詠は、何時^{いつ}だって傍に居るって、分かったから」

『そう。…泣いても良いのよ?』

絢は時使いの方を向いた。

「良いの?」

『良いわよ。』

絢は時使いに抱き付いた。そして、

「うわあああんっ」

あの時の様に、大声で泣いた。

そうね。そうなのかも知れない。

時間を戻す事によって全てが変わる。

でも…きっと。

きっと、時間を戻さなくても、変わることは出来る。

前を向いて歩いていけば…

そこには、きっと。

何かが在るはず。

だから人は、歩いていかなければならないのだろう。

愉^たえ苦しくても。辛くても。

時間に支配された、この世界を。

そしてこの国は、耐えられなくなった人の為に存在する。

時間を巻き戻す為に、存在する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3372d/>

巻き戻しの国

2010年10月28日03時28分発行